

Astronomisches Recheninstitut  
Berlin-Dahlem  
Altensteinstraße 40.

観 測 帖

花山天文臺 中 村 要



**1932 EA, (デルポト星)**は4月23日ベルゲドルフ天文臺の一米鏡で16時38.4分、 $+38^{\circ}31'$ の點で觀測された。光度は15.5等であつた。

**627 Charis の再発見.** 2月14日ハイデルベルヒ天文臺の Reinmuth の発見した1923 CZ は Kahrstedt 氏の軌道計算によつて1907年に発見され1914年以後行方不明であつた627號の再発見である事が分つた。

**553 Kundry** 2月11日に Reinmuth 氏によつて発見された1932 CL は553 Kundry と同一星である事が分つた。

此の星は1904年に発見されたまま今日まで行方不明であつた。

**869 Mellena** 昨年9月8日ハイデルベルヒ天文臺で発見された1931 RC といふ小遊星は行方不明であつた869號の再発見である事が知れた。

**近年の小遊星觀測** 最近になつてハイデルベルヒ天文臺、ユツクル天文臺等で発見される微光の新小遊星が急に多くなり、ハイデルベルヒ天文臺ではつい近年まで14.5等位までしか觀測して居なかつたのが急に15.0等まで進んだのである。觀測方法並びに乾板の進歩が以上の主な原因と思はれる。

**小遊星セレス** 第一號小遊星セレスは7月13日に衝になる。此の星は十九世紀の第一日、1801年1月1日でパレルモゴビアジが発見した明るい典型的の小遊星である。

月	日	時	分	0	1
7	8	19	32.6	-29	32
	16		24.9	-30	9
	24		17.4	-30	40

光度 7.7等

ユニオン天文臺の小遊星觀測 南阿ユニ

オン天文臺は南半球に於て小遊星觀測に従事する唯一の天文臺であつて、北半球の天文臺で撮影出来ない南天の小遊星を主として觀測して居るが、小遊星には觀測位置の都合でまだまだ南天のみで都合のよい衝になるものが多数未発見のまま残されて居るだけ將來が多い。寫眞器は有名な故フランクリン。アダムス氏が全天撮影に使用して同臺に寄贈したクック製口径25センチF4.5のフランクリン。アダムス。カメラで15度平方使用出来るが通常は10度平方を撮影して居る。撮影方法は連続して二枚別々の乾板に撮影し、Blink comparator で検出して居る。位置測定は三つの比較星を使ひ計算は關聯係數法によつて居る。最近數年間は二つづゝの精測位置を發表して居たが、最近には0.1分までの略測位置を發表して居る。觀測者は主として Wood, Jackson 氏等であり。すでに約20個の新小遊星を発見して居る。

**輕金屬と望遠鏡** 最近314年間に望遠鏡の各部分にヂュラルミンが盛んに使はれる様になつて相當大きなものまで旅行用に出來る様になつた。ハーゾード天文臺の150センチ鏡、ヤーキス天文臺の30センチ双望遠鏡も筒はヂュラルミンが使はれて居る。比較的重量のかゝる大口徑寫眞レンズの筒體にも使はれ始めた。

**觀測急報について** 急報は今後葉書に刷つて送る事に改めたので、希望者は宛名を書いた葉書を十枚位づゝ送つてほしい。品切れの節は其の時に品切れと記入する。

**光學研究室より** 5月中に55ミリ對物レンズを二個研磨する。焦點距離は70センチに選んだ。

今回彗星だよりを引受ける事になつた爲に多少内容も變つた事を御注意願ひたい。